

短期大学における施設保育士養成に関する一考察

～保育実習指導Ⅲ講義内容の検討～

今井 大二郎

A Study on Training Course for Nursery Teachers in Child Welfare in the Junior College

—Examine the Contents of the Preparation Course for a Childcare Practice III—

Daijirou IMAI

要旨

保育学生の就職先の選択に影響を与える一つの要因として、充実した実習での学びの機会がある。今回、短期大学における施設保育士養成の一つの機会として、実習本番の学びを充実させるための事前指導について検討した。まず「改訂 児童養護施設の研修体系—人材育成のための指針」「入職前職員」の研修内容及び「保育実習指導のミニマムスタンダードVer2 保育実習Ⅲの目標及び内容」を参考に6つの学習要素を設定した。

次に設定した内容で講義を行い、終了後、学生にアンケート調査を実施した。その結果8割の学生が保育実習Ⅲや施設への就職に向けて意欲が高まったと回答し、事前指導内容の検討は施設保育士養成の一つとして一定の成果が得られた。しかし、設定した学習要素の中には、養成校内での学習では、実感的理解についての困難さもあり、今後、養成校と社会的養護現場との連携を行うといった教授方法の改善の必要性が示唆された。

キーワード：施設保育士養成、保育実習指導Ⅲ、保育実習Ⅲ、施設保育士の専門性

1. 研究背景

児童養護施設をはじめとして、多くの社会的養護施設では、慢性的な職員不足の状態が続いている施設が多い。その要因は、社会的な認知度が低いこと、宿直等の宿泊を伴う勤務や断続勤務といった労働条件が変則的なこと、あるいは精神的にも肉体的にも負荷が大きい等様々な要因が考えられる。実際に、社会的養護に関連する講義を受けて社会的養護分野に関心を深く抱く学生も少なくない。しかし、そうした学生が施設へ就職を希望するかは別問題である。このように就職を希望する者の全体数が限られ、人員不足が続けば、職員一人ひとりへの負担も

増す。社会的養護に携わる職業は、本来、子どもやその家庭の自立を支援するという、職業としての意義深さややりがいが大きくある。職員不足は、現場で働く個々の職員のモチベーションを下げ、離職率の増加といった悪循環に陥りかねず、結果として子どもの安定した生活が揺らぎかねず、施設現場にとっては大きな課題の一つである。

加えて保育士養成においても、児童養護施設等の社会的養護施設に対する認知度は高いとは言えない。保育士養成校に入学する学生について、宮崎他（2008）は、「保育士は保育所における保育士というイメージが圧倒的に多く、就

職の第1希望は、保育園、幼稚園と考えられ、大学入学時から施設への希望を持っている学生は少ない」¹⁾としている。

こうした傾向は、保育士養成校の就職先の状況からも伺える。例えば、平成27年度第3回保育士等確保対策検討会の厚労省資料によると、2014年度末に保育士資格を取得した者の数は、大学が11,452人、短大が25,358人、専修学校が4,948人であった。そのうち、保育所以外の児童福祉施設に就職した者は大学が491人(4.3%)、短大が777人(3.1%)、専修学校が285人(5.8%)といずれも一桁の割合となっている²⁾。

このような背景から、厚生労働省でも「令和4年度社会的養護魅力発信等事業」の実施に動く等、人員確保に向けた取り組みが進められている³⁾。

また、児童養護施設をはじめとした社会的養護施設の人材確保という課題に向け、各養成校でも様々な取り組みが行われている。

例えば、杉山(2013)は、2013年に児童養護施設職員との共同で「社会的養護人材養成研究会」を発足して様々な取り組みをしている。また、2016年9月には養成校教員などと共に「一般社団法人児童養護応援団」を設立し研修会を開催する等、人材確保や施設保育士の育成に尽力している。

こうした活動を通して、杉山(2018)は、「施設保育士の魅力を伝え、学生に関心を抱かせる難しさがあり、教員のスキルアップが求められる」ことや「施設に対して関心を抱かせた学生を就職に導くためには、施設での実習が与える影響は大きい」⁴⁾ことを指摘している。

また、実習やインターンシップの重要性について上村(2016)は、児童養護施設におけるインターンを行い、その有用性を明らかにしている⁵⁾。

以上のことから、保育士養成校における施設保育士の育成や人材確保に向けた取り組みの必要性は、社会的養護を必要とする子どもの支援

の質を担保する上でもとても大きな意義がある。

一方で、保育士養成は、筆者が所属する短期大学においても行われている。周知の通り保育士養成の短期大学は、二年間で幼稚園教諭二種免許と保育士の両資格を取得して保育現場や社会的養護の現場に出る。短い期間での資格取得は、学生にとってメリットがある一方で、4年制大学と比較してタイトな学習や実習のスケジュールをこなしていかなければならず、先述したインターンシップへの参加等困難になりかねない。

実際に、筆者の所属する短大においても、東京都社会福祉協議会児童部会等が開催する児童養護施設の見学会や説明会の告知をしても、参加したいという思いがありながら保育実習や教育実習、定期試験、補講への参加、あるいは土曜日の集中講義への出席等とスケジュールが重なって参加を断念した学生もいた。

ただ、過密なスケジュールの中でも決して、施設でのインターンシップや見学等現場に触れることができないわけではなく、実際に施設の主催する数か月間にわたるインターンシップに参加する学生がいることも事実ではある。しかし、養成校での学校生活に加えてこうした活動への参加に、負担が大きいことは否めない。

そこで、本研究では、保育実習Ⅲを選択した学生が履修する「保育実習指導Ⅲ」の保育実習Ⅲに向けた事前指導の講義内容に焦点を当てる。言うまでもなく保育実習の機会は、学生の進路選択にも大きな影響を及ぼす。実際に大和田他(2014)も「施設実習という体験的な学びを通して施設保育士を認識し、実習を通して援助者としての「保育士」への意識が変容する学生が多く見られる」⁶⁾ことを指摘している。この指摘は、橋本(2013)の「施設実習は、学生が保育士の幅広い専門性を理解する体験であり、職業選択として施設で働く保育士をイメージする重要な機会である」⁷⁾という点とも一致する。

さらに先述した杉山（2018）の「施設に対して関心を抱かせた学生を就職に導くためには、施設での実習が与える影響は大きい」こともとも重なる。

これらのことに加え、保育実習Ⅲは、学生が進路選択を踏まえた上で保育実習Ⅱとどちらかを選択して履修するという性格の科目でもある。従って、社会的養護に関心が高い学生が保育実習Ⅲを履修し、その実習本番に向けた事前指導がより充実したもので、学生の有意義な実習体験により多く活かされるのであれば、進路選択にもある程度の影響を及ぼすのではないかと考える。

加えて、「充実した実習体験」ということで言えば保育士養成における「施設保育士の専門性」の獲得という点にもつながる。すなわち、施設保育士の専門性について保育士養成カリキュラムの講義の中でも意識的に取り入れ、実習に活かすことでより深い学びにつながる。

ただ、この「施設保育士の専門性」について、これまで明確な定義はなく、また「保育所と保育所以外の児童福祉施設等の保育士の専門性の違いの有無」といったことも明確化されていない。青木・奥（2021）は、「施設保育士の専門性」について、「専門職として必要な知識、技術、倫理観といった3つの柱は、専門職として当然備えないといけない能力の中核、つまり専門性の根拠であると位置づけられる」とし、この点について「養成校と施設現場との養成方向に一致が見られると、施設現場での就職を考え、就職後もその能力がいかに発揮することができる」としている⁹⁾。

無論、知識・技術・倫理観は、保育士業務のケアワーク、ソーシャルワークの二つにつながるものと考えられるが、短期大学の養成校学生に対して、具体的にどのような学習内容を提供するかは整理する必要がある。

そこで、今回、保育実習Ⅲ前の事前指導として位置づけられている「保育実習指導Ⅲ」の講義内容について、こうした「施設保育士の専門

性」ということも参考に、短期大学における保育実習Ⅲを充実した学習機会とするために必要な学習内容を整理することを試みる。

2. 研究目的と方法

(1) 研究目的

本研究は、短期大学の施設保育士養成のあり方の一つとして、就職に影響を与えうる保育実習Ⅲにおいて、事前指導の学習機会となる保育実習指導Ⅲの講義内容について検討することを目的とする。ただ、これは実習体験の充実に向けた短期大学における事前指導の内容の検討であり、保育実習指導Ⅲの内容をそのまま施設への就職へと結びつけていこうとする試みではない。あくまで充実した事前学習の学びや実習体験から生まれる結果として、保育士養成校学生が自発的に施設保育士を志向するという過程における一つの取り組みであることは付言して、短期大学における一つの事例として提示していくことを目的とする。

(2) 研究方法

初めに講義内容について、「施設保育士の専門性」ということを参考に全国児童養護施設協議会の「改訂児童養護施設の研修体系一人材育成のための指針」⁹⁾に示されている6階層の育成レベルから「入職前職員」の研修内容を取り入れた表1参照。重ねて、「保育実習指導のミニマムスタンダードVer2」に提示されている「保育実習Ⅲの目標及び内容」表2の内容¹⁰⁾を踏まえ「保育実習指導Ⅲ」の講義内容について整理した表3。

次に講義を受講して、講義内容が「保育実習Ⅲに活かせるか否か」について、アンケート調査を実施した。

3. 倫理的配慮

講義時間内において、アンケート調査を実施するにあたり、本アンケートは、①成績評価とは一切関係がないこと、②本講義について、今

表 1 入職前職員研修内容

領域	入職前職員
①人材育成の基本	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の児童福祉の概況と社会的養護の概況を知る。 ・児童養護施設の現状と課題について理解する。 ・人材育成の重要性を知る。 ・SVを受けることの意義を理解する。
②資質と倫理	<ul style="list-style-type: none"> ・心身の健康について理解し、自分自身の健康管理ができる。 ・基本的な生活を営むためのスキル（食事、洗濯、掃除、その他）の習慣。 ・基本的な社会的スキル（接遇など）の理解。 ・自分の個性や特技を理解し、子どもとの関わりに活かすことができる。
③資質と倫理	<ul style="list-style-type: none"> ・心身の健康について理解し、自分自身の健康管理ができる。 ・基本的な生活を営むためのスキル（食事、洗濯、掃除、その他）の習慣。 ・基本的な社会的スキル（接遇など）の理解。 ・自分の個性や特技を理解し、子どもとの関わりに活かすことができる。
④子どもの権利擁護	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの権利擁護について理解する。 ・子どもに対する不当な扱いについて理解する。 ・守秘義務と必要な情報共有について理解する。
⑤知識	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの権利条約。 ・社会的養護の基盤となる法制度。 ・身体的発育について。 ・心的発達について。 ・家族に関する理論。 ・生活の営みに関する基本的な知識。 ・社会的養護の現状等に関する基本的な知識。 ・生涯発達についての李問屋知識。
⑥子どもの支援技術	<ul style="list-style-type: none"> ・健康的な生活の営みについて基本的な技術を身につける。㉗ ・傾聴、共感、肯定的評価など基本的姿勢を理解する。㉘ ・アセスメントの意義について理解する。㉙ ・カンファレンスの意義について理解する。㉚
⑦チームアプローチと機関協働	<ul style="list-style-type: none"> ・チームアプローチについて理解する。㉛ ・社会的養護に携わる専門職について理解する。㉜ ・児相を中心に社会的養護と連携する機関について理解する。㉝
⑧家族支援	<ul style="list-style-type: none"> ・家族に対する基本的な対応を身につける。㉞
⑨里親・ファミリーホーム支援	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭養護について理解する。㉟ ・里親制度について理解する。㊱

表 2 「保育実習指導のミニマムスタンダードVer2 保育実習Ⅲの目標及び内容」

<p><目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 既習の教科目や保育実習の経験を踏まえ、児童福祉施設等（保育所以外）の役割や機能について実践を通して、理解する。 2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉、社会的養護、障害児支援に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を習得する。 3. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。 4. 実習における自己の課題を理解する。
--

<内容> 1. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割と機能 ㊴ 2. 施設における支援の実際 (1) 受容し、共感する態度 ㊵ (2) 個人差や生活環境に伴う子ども（利用者）のニーズの把握と子ども理解 ㊶ (3) 個別支援計画の作成と実践 ㊷ (4) 子ども（利用者）の家族への支援と対応 ㊸ (5) 各施設における多様な専門職との連携・協働 ㊹ (6) 地域社会との連携・協働 ㊺ 3. 保育士の多様な業務と職業倫理 ㊻ 4. 保育士としての自己課題の明確化 ㊼	
---	--

表 3 実際の講義内容

回	講 義 内 容	項 目
1	オリエンテーション（スケジュール、目的、評価等説明、実習先希望調査、誓約書記入）	
2	ワーキングチーム形成に向けた活動①（PAの手法を用いたグループワーク） ¹¹⁾	㊴
3	ワーキングチーム形成に向けた活動②（新聞記事の親ってなんだろうという問いに対する子どもの実際の声について、各学生の捉え方について発表・ディスカッション） ¹²⁾	㊵㊶㊷
4	・対人援助の基礎Ⅰ（ラボールの形成を促す傾聴姿勢の重要性） （気持ちが伝わった時のうれしさと伝わらない時の子どもの歯がゆさ等を体感） ¹³⁾	㊸㊹
5	・対人援助の基礎Ⅰ（3段階の聴き方） ¹⁴⁾ （面談時の適切な座り方から、笑顔、優しい雰囲気、うなずき等、具体的なプラスのストロークについて） （無表情→すべて繰り返し→じっくり傾聴の3段階で相手の話しを聴く演習を行い、相手の態度が話し手に与える影響について体感）	㊸㊹
6	・対人援助の基礎Ⅱ（具体的な傾聴技法） （うなずき/あいづち/励まし/繰り返し/言い換え/閉じた質問・開いた質問/感情の反映/要約等の傾聴技法について） ¹⁵⁾	㊸㊹
7	対人援助の基礎Ⅲ（保護者支援の基本的対応）（受容や価値観の多様性、相手の思いを受け止めることを体感） ¹⁶⁾	㊸㊹
8	児童心理治療施設動画視聴（動画視聴後の実際の支援の困難性に関するディスカッション）	㊵㊷
9	保育実習Ⅰ（施設）事例カンファレンス（資料「SOSを受信すること」に基づくディスカッション） ¹⁷⁾	㊵㊶㊷
10	児童自立支援計画書/個別支援計画書の概要や策定方法（アセスメント方法から策定の留意点についての解説） ¹⁸⁾	㊶㊷㊸㊹ ㊺㊻
11	現場保育士の講話（社会的養護におけるケアワーク・ソーシャルワークの実際/専門職：里親支援の実際）	㊴㊵㊶ ㊷㊸
12	社会自立に伴うリービングケア・アフターケアにおける関係機関との連携した支援における課題解決事例検討	㊵㊶㊷ ㊸
13	実習先の紹介（自己の実習先について及び自己の実習目標についてPPを用いて発表する）	㊶㊷㊸ ㊹
14	・保育実習Ⅲ事前指導（事前オリや手続き） 記録について	
15	実習反省報告会	

＜授業内容を構成する6つの学習要素＞

- ①チームアプローチ・チームワーク（2回目、3回目）
- ②ラポールの形成に向けた直接的援助技術の習得（4回～7回目）
- ③個人差や生活環境に伴う子どものニーズの把握と子ども理解（8回目）
- ④保護者への支援・対応（9回目）
- ⑤個別支援計画（10回目）
- ⑥専門職との連携した支援（11回目、12回目）

後より充実した講義内容を設定していくための目的で行うものであること、③アンケート結果を学会等で発表する予定である旨を説明した。そして、回答の提出をもって承諾を得ることとした。

4. 結果と考察

(1) 保育実習Ⅲに向け充実した学習内容の整理

2022年度に実施する保育実習指導Ⅲの講義内容について、「改訂 児童養護施設の研修体系一人材育成のための指針」に示されている6階層の育成レベルのうち「入職前職員」の研修内容^{表1}から、2年次までに本学で学習してきた内容と重なる項目を除き、また特に保育実習Ⅲに直接的に関連する領域「⑤子どもの支援技術」及び⑥チームアプローチと機関協働、「⑦家族支援」の項目を取り入れた(㉗～㉙)。重ねて「保育実習指導のミニマムスタンダードVer2」に提示されている「保育実習Ⅲの目標及び内容」^{表2}を反映(㉚～㉜)させ、6つの学習要素から構成する授業内容を作成した。その上で記号を振った学習項目が何回目の講義で、反映しているかについて整理した表3。第1回目や14回目15回目のオリエンテーションや事前指導等の内容は、本研究の主旨と異なるため除外した。

一つ目は①「チームアプローチ・チームワーク」といったチームワークの形成・チーム援助の重要性である。2回目(4/19)、3回目(4/26)は、その後の講義内で、活発な議論が行えるよう、チームワークの形成を目的とした。2回目は体を動かしながらのグループワークを通し

て、3回目は子どもの言葉について、自分はどう捉えたかということを経験記事に掲載されている子どもの具体的な言葉から想像し、ディスカッションして、捉え方の違いを認識し相互尊重する大切さを学習のねらいとした。

「施設保育士の専門性」を育む上で、①のチームアプローチやそれを支えるチームワークは欠かせない。また「チーム援助」という学習の視点を持つことで保育実習Ⅲの現場での学びとしても不可欠である。施設現場において、チームワークは、その環境で暮らす子どもにもよくも悪くも影響を与えうる。

二つ目は、㉚㉛にある傾聴・受容といったラポールの形成に向けた具体的な直接的援助技術の習得(4回～7回目)である。この直接的援助技術の習得は、バイステックの7原則にある「意図的な感情表出」や「統制された情緒的関与」、あるいは「非審判的態度」等すべての原則の基盤を成す。

三つ目は、主に㉜にある「(2)個人差や生活環境に伴う子ども(利用者)のニーズの把握と子ども理解」である。これは8回目の講義内容となるが、本講義では、対象となる子どもは、子ども虐待による心の傷を抱えた子どもであり、自立支援の一側面として児童心理治療施設の生活の動画¹⁹⁾を視聴して意見交換を行った。感情のコントロールが難しい実際の子どもの姿や、自立に向け継続して子どもに伴走する支援者の姿は、支援の難しさやより専門的な知識、さらには一伴走者としての根気をも必要とすることが深く理解できる内容である。

四つ目は、主に㉝㉞にあるカンファレンスに

おける問題の洗い出しも含めた「保護者への支援・対応」についてである。9回目の講義では、参考文献を用いて虐待加害者となる保護者への支援についての学習を行った。

五つ目は、主に㊦㊧㊨㊩の要素が中心となる「個別支援計画」の作成から実践である。10回目の講義では、児童自立支援計画書の策定について、支援計画の性格や計画内の項目の意味、利用者主体の支援計画の作成の重要性、あるいは策定上の作成者の留意点について等の学習を行った。

六つ目は、㊪㊫㊬にある専門職について、あるいは多様な「専門職との連携した支援」についてである。

(2) アンケート調査の結果と考察

1) 回答者

筆者が所属する短期大学で、保育実習指導Ⅲ及び保育実習Ⅲを履修した学生10名を対象とした。本学では、学生が選択する保育実習Ⅱ・Ⅲの履修について、保育実習Ⅲは基本的に保育所以外の児童福祉施設等への就職を視野に入れていることを要件として履修するよう説明している。

保育実習Ⅲで希望する実習先の種別としては、乳児院が2名、児童養護施設が8名であった（うち1名は、諸事情により児童発達支援事業所で実習を行うこととなった）。アンケート調査は、14回目の講義内で実施した。

2) 質問項目

質問項目について以下に示す。また、各回の講義内容について、学生の記憶が薄れているこ

とを考慮して、具体的な講義内容を振り返りながら回答できるよう「2022年度前期保育実習指導Ⅲ講義内容」を配布した。講義を欠席した学生については、欠席した授業日について事前に知らせ、その回の回答は無回答とした。

3) 質問項目①回答結果

保育実習Ⅲに向けて各回の講義内容が、有意義な内容で、実習中の学びに活かせる内容だったと思うか否かについて5件法で回答を求めた（5:とてもそう思う、4:まあそう思う、3:どちらとも言えない、2:あまりそう思わない、1:全くそうおもわない）。アンケート計結果について以下に示す表4。

各回において、概ね「授業内容が実習本番に活かせる」という問いに対して高い評価の回答が得られた。

アンケートの回答から、①「チームアプローチ・チームワーク」について、子どもの発する

表4 各回の講義内容毎の学びの充実度回答数

回/評価	5	4	3	2	1
2回(4/19)	6	3			
3回(4/26)	9				
4回(4/26) 5限	8		1		
5回(5/10)	8	1	1		
6回(5/17)	8	2			
7回(5/17) 5限	8	1			
8回(5/24)	10				
9回(5/31)	7	2	1		
10回(6/28)	7	2			
11回(7/5)	7	3			
12回(7/12)	5	2	1		
13回(7/19)	5	2	2		

〔質問項目〕

- ①「2022年度前期保育実習指導Ⅲ講義内容」を参考に各回の講義内容が、保育実習Ⅲに向けて有意義な内容で、実習中に活かせる内容だと思いますか（5件法）。
- ②保育実習指導Ⅲの講義を14回目まで受講して、保育実習Ⅲに臨むにあたり学習意欲は高まりましたか（5件法）。
- ③保育実習指導Ⅲの講義を受講して、「施設への就職に関する関心」は高まりましたか（5件法）。

言葉から、様々な内面を探るという機会、あるいは自分の視点になかった他のメンバーの意見や考えに対する気づき等、チームで話し合う大切さを理解したものと思われる。そのため、学生の反応も良く、8割以上の学生が実習に活かせるかについて「とてもそう思う」と回答している。

②「ラポールの形成に向けた直接的援助技術の習得」について、本講義では、4回～7回目に実施した。子どもや保護者との対話やコミュニケーションで、具体的に支援者がラポールを形成する上で必要な技術を駆使していることを体感する内容である。例えば子どもが伝えづらいと感じる場面において、ゆっくり相づちをうつつといったプラスのストロークを身に着ける演習を実施した。学生も自分の表情や言動に意識を払うといった気づきが伺えた。

③「個人差や生活環境に伴う子どものニーズの把握と子ども理解」について、学生にとっては、社会的養護の厳しい現実でも実際の施設生活を垣間見ることが出来る機会となり、全員が実習に活かせるかについて「とてもそう思う」と回答している。この点からも、学生の学習内容への高い要望としては、現場の具体的・体験的な学びが挙げられる。

④「保護者への支援・対応」についても保育実習Ⅲでは、学びの視点の一つとして不可欠な内容である。加害してしまう保護者の心境や、子ども虐待の発生要因として、家族機能不全によって引き起こされるという背景を学ぶことが学生も保護者理解につながる大切学びとして捉えている様子が見受けられた。

⑤「個別支援計画」について保育実習Ⅲは、支援計画について具体的に学ぶ機会であり、支援計画を踏まえた日常の支援の意図やねらいを理解するという側面から高い結果となっている。

⑥「専門職との連携した支援」は、現場で働く専門職について、今回11回目の講義では、実際に乳児院で里親支援をしている専門職の外

部講師を招いて講話を聞いた。また、12回目は、事例を用いたソーシャルワークに関する学習であった。その中で具体的なリービングケア・アフターケアの過程において、課題に応じてどのような関係機関と連携して支援を行うか、あるいは連携上の支援者の留意点について学習した。ただ、保育学生にとって、関係機関との連携の大切さは理解しつつも、その重要性や実際の課題の大きさといったことは把握しづらく、回答結果からもそうした難しさが伺えた。

以上、6つの要素に整理されたが、無論、保育実習Ⅲに臨むにあたっての基本的な学習内容、すなわち⑦や⑧について、あるいは⑨⑩といった職業倫理や自己の課題の明確化といったことはしっかりとこれまでの講義でその内容を押さえての前提項目となる。保育士倫理綱領についても他の科目でその重要性を学んでいる。本講義では、13回目に、学生が自らの実習先について、種別や特徴的な支援内容、施設形態その実習先にまつわる福祉的課題等について事前学習したものを発表する機会とし、その後自己の実習目標を設定している。

その他、14回目の講義は、エピソード記録の書き方をはじめとして記録の記入について指導した。

今回、「保育実習指導Ⅲ」の講義内容について、6つの学習要素から整理した。①「チームアプローチ・チームワーク」②「ラポールの形成に向けた直接的援助技術の習得」、③「個人差や生活環境に伴う子どものニーズの把握と子ども理解」、④「保護者への支援・対応」について、実際に保育実習Ⅲで直接的に活かせる内容と思われる。しかし、⑤「個別支援計画」及び⑥「専門職と連携した支援」については、養成校の教授内容としては、様々な点から難しさがある。青木・奥（2021）が言う「養成校と施設現場との養成方向に一致」という点では、養成校と現場との明確な役割分担が求められるのではない。すなわち、学生の反応として、児童相談所をはじめ心理職や医療機関、あるいは保健所や

福祉事務所といった様々な専門職や関係機関があり、役割に応じて連携した支援を行っていることは理解できる。しかし、どのような時にそうした機関と連携すべきか、あるいはイニシアチブをとるのはどちらかといった具体的な連携した支援を行う上での留意点は、事例学習を通して実感的な理解にはつながりにくく、社会的養護の現場でより実践的に力をつけていく内容として学んでいくほうが良いのではないかと考える。

また、こうした実習前に学生が学んだ具体的な学習内容について、実習先となる施設とも共有し、実習中の学習内容を精査することで、青木・奥（2021）が言う「養成校と施設現場との養成方向に一致」ということもより具体的に役割分担ができていくのではないかとと思われる。

4) 質問項目②の回答結果

次に、保育実習指導Ⅲの講義を14回目まで受講して、保育実習Ⅲに臨むにあたり学習意欲の高まりについて、5件法（5：とてもそう思う、4：まあそう思う、3：どちらとも言えない、2：あまりそう思わない、1：全くそうおもわない）で回答を求めた表5。

5) 質問項目③の回答結果

さらに保育実習指導Ⅲの講義を受講して、「施設への就職に関する関心」は高まりについて、5件法（5：とてもそう思う、4：まあそう思う、3：どちらとも言えない、2：あまりそう思わない、1：全くそうおもわない）で回答を求めた表6。

「施設保育士の専門性」という観点も含め、

充実した事前学習の学びや実習体験に役立つための学習内容を反映した講義内容ということで、今回講義を実施したが、概ね良好な回答が得られた。質問項目③の施設への就職に関する関心の高まりについては、2名が「3.どちらとも言えない」と回答している。これは、関心はあるが、実際に就職を希望する施設での実習をまだ経験していないことからの回答と考えられる。

5. まとめ

今回、「改訂 児童養護施設の研修体系—人材育成のための指針」及び、「保育実習指導のミニマムスタンダードVer2」の「保育実習Ⅲの目標及び内容」を参考に保育実習指導Ⅲの講義内容について設定し講義を実施した。その結果、6つの学習要素（①チームアプローチ・チームワーク、②ラポールの形成に向けた直接的援助技術の習得、③子どものニーズの把握と子ども理解、④保護者への支援・対応、⑤個別支援計画、⑥専門職との連携した支援）として整理した。

次に整理した内容で授業を行い、その内容について学生にアンケート調査を実施した結果、保育実習Ⅲや就職に向けて、8割以上の学生が意欲が高まったと回答し、授業内容の検討は、一定の成果が得られた。

この結果により、今後、より充実した保育実習Ⅲでの学びを高めていくために、養成校での具体的な学習内容を実習先の施設にも伝え、その上で養成校と現場の具体的な役割分担を行う

表5 保育実習Ⅲに向けての意欲の高まり

項目	人数
5 とてもそう思う	9
4 まあそう思う	1
3 どちらとも言えない	
2 あまりそう思わない	
1 全くそう思わない	

表6 施設への就職に関する関心の高まり

項目	人数
5 とてもそう思う	8
4 まあそう思う	
3 どちらとも言えない	2
2 あまりそう思わない	
1 全くそう思わない	

ことで、短期大学の施設保育士の養成を目指した学生の充実した学びを保障していくことにつながると思われる。

従って、次の課題としては、①今回設定した学習要素が、施設現場が考える内容も含め妥当であるか、②どのように施設と連携していくかという課題があり、今後明らかにするために具体的に実習先と連携してこうした取り組みを強化していきたい。そうすることで、学生の求める現場における直接的な体験に関する学習についても、より充実したものになると思われる。

最後に、今回筆者は、アンケート調査を実施した際に「なぜ社会的養護に関心を持ち、保育実習Ⅲを履修したのか」という質問も行った。その結果、「短期大学入学後に社会的養護Ⅰ等の講義を受けて関心を持った」という回答が最も多く(70%)、次いで「施設への就職を考えていた」(60%)の順であった。杉山(2018)は、「施設保育士の魅力を伝え、学生に関心を抱かせる難しさがあり、教員のスキルアップが求められる」としているが、今後もこうした講義内容の検討や改善を積み重ねていく必要がある。

また、「施設保育士の専門性」を育むという視点も、今後さらに吟味して定義や育むためのカリキュラム内容を検討することが求められる。こうした観点から、社会的養護分野での人材育成に少しでも寄与し、子どもの安定した生活を支えていく必要があると思われる。

<引用・参考文献>

- 1) 「保育系短大生における施設実習後の施設イメージの変化」宮崎隆穂・吉川明守・宮越敏夫(2008)新潟青陵大学短期大学部研究報告(38). pp175-181
- 2) 「厚生労働省第3回保育士等確保対策検討会参考資料1 保育士等に関する関係資料」(平成27年12月4日)
- 3) 令和4年度 社会的養護魅力発信等事業に係る公募について<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/>

kodomo_kosodate/topics/tp190624-01_00007.html(最終閲覧:2022年7月15日)

- 4) 「社会的養護系施設保育士の養成、人材(人材)確保、育成のあり方と実践的取り組みについて～児童養護施設を中心に～」杉山宗尚 頌栄短期大学研究紀要//頌栄短期大学編 42:2018 pp15-25
- 5) 「社会的養護施設の保育士養成のためのインターンシップに関する実践報告」上村宏樹 こども教育宝仙大学紀要(7)2016.3 pp69-76
- 6) 「保育士養成における施設実習研究の現状について」橋本好広 近畿大学豊岡短期大学論集 第10号 2013.
- 7) 「保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化」大和田明見・関根美保子・鈴木春江 帝京大学教育学部紀要2014.3,pp275-284
- 8) 「施設保育士に求められる「保育士の専門性」」青木幹生,奥典之 美作大学・美作大学短期大学部紀要(66):2021 pp51-55
- 9) 「保育者養成課程における保育ソーシャルワーク教育の課題—「施設実習」の保育ソーシャルワークにかかるカリキュラムの考察—」中田喜一・佐々木徹雄・吉森恵 神戸医療福祉大学紀要 2021.12 pp83
- 10) 「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver2」全国保育士養成協議会編 中央法規 2018.7.1 pp116
- 11) 『対立がちからに一グループづくりに生かせる体験学習のすすめ』ウイリアム・J・クレイドラー●リサ・ファーロン著 プロジェクトアドベンチャー ジャパン 訳みくに出版 2001年12.10
- 12) 「子どもの声聞こえてる? 第1部かぞく」2008年7月29日(火)朝日新聞朝刊記事
- 13) 『対人援助とコミュニケーション—主体的に学び、感性を磨く—』諏訪茂樹 中央

- 法規出版 2007年3.10初版第7刷 pp26
～29
- 14) 『対人援助とコミュニケーション—主体的
に学び、感性を磨く—』 諏訪茂樹 中
央法規出版 2007年3.10初版第7刷
pp102
- 15) 『コピーしてすぐ使えるコミュニケーショ
ンスキルが身につくレクチャー&ワーク
シート』西村宣幸 学事出版 2017年1.15
第9版 pp74～76
- 16) 『対人援助とコミュニケーション—主体的
に学び、感性を磨く—』 諏訪茂樹 中央
法規出版 2007年3.10初版第7刷 pp80
～86
- 17) 『子を、親を、児童虐待から救う先達32
人現場の知恵』鈴木秀洋 公職研 2019
年11.19 pp30～34
- 18) 『Leaving Care児童養護施設職員のための
自立支援ハンドブック』平成23年改訂4
版3刷 (福)東京都社会福祉協議会児童
部会リービングケア委員会
- 19) 『追跡A to Z』虐待の傷は癒えるのか～子
どもたちの格闘～2009年7月4日NHK